

複製版

原裝複製

敗戦の焦土から、
いち早く飛び立った

『赤い鳥』後継誌

赤とんぼ

全31冊
別巻1

戦後児童文学雑誌の白眉

幻と言われた稀覯雑誌、
ついに全貌を現す！

複製版編集 上 笙一郎・長谷川 潮 編集協力 菊永 謙

『本書は大空社が2010年
2月に復刻刊行したもので、
この案内は発刊時のものの改
編抄録です。』

★ご注文はいますぐ

2024.12

残部 1組

大空社出版

eigy@ozorasha.co.jp

☎ 042-306-3383

東京都東村山市秋津町 5-24-13-101

複製版 赤とんぼ

複製版編集 上 笙一郎・長谷川 潮 編集協力 菊永 謙

全 31 冊 (原装にならう複製) 別巻 1
フルカラー再現

A 5 判・並製・平均 64 頁/別巻 約 300 頁

ISBN978-4-283-00744-4

セット定価 (本体 85,000 円 + 税)

戦後の児童文学は
この雑誌から始まった!
『赤い鳥』の精神を復興する
記念碑的雑誌!

特色

- ① 戦後最初に創刊された児童雑誌(昭和21年4月〜23年10月、全31冊)で、後に残る重要な作品・作家を多数掲載した。竹山道雄「ビルマの竖琴」、青木茂「三太物語」、ケストナー「飛ぶ教室」等、多くは本誌が初出であった。
- ② 童話・童謡(歌詞・楽譜)・詩・各種読み物・綴方・イラストレーションと児童文化全般にわたりに行き届いた目配り、豪華な執筆者が光る。
- ③ 童謡・詩・楽譜は他の同時期の雑誌に比べ抜きんでて数多く掲載されており、童謡史上で重要な役割を果たした。
- ④ 全国の教育現場から投稿を得た戦後綴方教育の実践記録で、川端康成が選にあたり、毎号「選の言葉」を執筆した。
- ⑤ 様々な読物のコーナーを設け、児童読物として深味を持たせる工夫がなされている。(科学・社会・人文、良書予報、匿名筆者によるエッセイ等)
- ⑥ 児童だけでなく、戦後の日本社会の生の雰囲気を知る様々な材料を提供する。
- ⑦ 発刊当時の生徒・指導者による記録・回想を含む、論文集・目録・索引を別巻とした。

研究者垂涎の的
「幻」と言われた稀覯雑誌!

図書館・研究室

必備

複製版書影



*特製貼箱入り

2024.12

残部
1組

★ご注文はいますぐ

大空社出版

eigy@ozorasha.co.jp

☎ 042-306-3383

東京都東村山市秋津町
5-24-13-101

複製版

赤とんぼ

全 31 冊
(原裝複製)

別巻(解説編) 1

『赤い鳥』の精神を継承

大仏次郎・川端康成・岸田国士・豊島与志雄・野上弥生子の名が列記された「赤とんぼ会」とは、昭和20年8月の敗戦後、理想的な児童雑誌を発刊しようと準備を始めた藤田圭雄に、精神的援助と協力を惜しまなかつた五人の作家からなる「無形の団体」である。

藤田には、第一級のすぐれたものこそ、本物の人間を育てる、という信念があつた。すなわち、かつて隆盛をみた『赤い鳥』運動の根柢に通じる理念である。

雑誌『赤とんぼ』は「赤とんぼ会」を陰の後盾とした藤田が、敗戦の焦土から立ち上がりつつある次世代に向けて贈つた、「本物」の芸術文化の香気に満ちた、美しく、豊かで、明るく、楽しい読み物と知識の玉手箱だつた。

『赤とんぼ』はわずか2年半という短命であつたが、戦後の児童文学に、爽やかな曙光をさし入れた。

戦後の児童文学は

『赤とんぼ』から始まつた!

〈原誌〉昭和21年4月～23年10月
実業之日本社・発行

*「皆さんとお話する頁」は毎号最終頁に藤田が書いた編集後記。『赤とんぼ』の出版・編集意図、読者からの反響だけでなく、当時の読書・教育・文化・社会環境の雰囲気が見える貴重な情報に満ちている。

皆さんとお話する頁★

(抜粋・一部省略)

(つづ)

● 藤田圭雄 (ふじた・たまお)

明治36年(1905)～平成11年(1999)。童謡詩人、童謡史研究家、児童文学者、編集者。東京生まれ。開成中学在学中に『赤い鳥』『金の船』に童謡を投稿、掲載される。早稲田大学独文科卒。昭和5年、平凡社入社、『大百科辞典』の編集に携わる。昭和12年、中央公論社に移り『婦人公論』、児童読物叢書『ともだち文庫』などを編集・刊行。戦後、実業之日本社で『赤とんぼ』を担当した後、中央公論社に復帰し『少年少女』を創刊、その後同社で重職を務める。童謡集『ぼくは海賊』(昭和40)、『地球の病気』(昭和50)他、童話創作や研究資料『日本童謡史』(昭和46、改訂59)など著作多数。長く日本児童文学者協会会長であつた。

● 『赤とんぼ』編集人

▼〈創刊号〉昭和21年4月 お父様にいただいたかお母様を買つて来て下さつたか、ともかくこの雑誌、あなたはすぐ読んでしまつたでせう。ずつと前からかうしてあなた方と自由にお話したいと何べんか考へてゐた、その思ひがやつとかなつた今、こんな貧しい姿でしかお目にかかれぬのを本当に残念だと思ひます。しかし今のわれわれとしてはこれがせい一ぱいの努力です。執筆の諸先生も不自由な間で出来るだけのことをして下さいました。そして号一と内容も豊かに、あなた方の為に益々の美しく美しい雑誌に育てあげて行くつもりです。あなた方も本当に自分の雑誌だと思つて、遠慮なくいろいろな注文をよこして下さい。綴方や画や詩や童話や、あなた方の手で作られたものがあつたらどしどしと送つて下さい。いいものは出来るだけ誌面をさいてあなた方に提供します。われわれもあらゆる方面の方々にお願ひしていい原稿をあつめ、一頁をも一字をも無駄なくあなた方の為に本当に良い雑誌を作ります。▼昭和21年7月 五月十一日の午後一時から赤とんぼ編輯室で、綴方教育に熱心な東京都下の国民学校の先生方のおつまりがありました。出席者は(…)。戦時中に児童の綴方の芽はすつかり枯らされてゐるので、第一歩からやりなほしだ——といふ御意見が大部分でした。しかしかうしたふんぬ気の中に綴方の新しい芽はすくすくとのびて行くこととせう。全国各地にこんなあつまりが一つづつでも出来てくれるとたのしいと思ひます。▼昭和21年11月 今月はこの頁を全部読者の方々からの通信でうめることにしました。面積がせまいのでほんの一部分しかのせられないので残念です。*赤とんぼ第一号を見ました。十分の準備がととのはず間に合せのところが見えます。いい童話がない。中谷、緒方二博士のものはよい。(諏訪・田中) *赤とんぼはもつと面白くないでせうか。たとへば自分

『赤とんぼ』の満ち足りた2年半の軌跡

■ほんの一部の作品の紹介です。

童話

生活、リアリズム、小説、メルヘン、民話、神話、海外作品紹介など多彩な内容

青木茂「かっぱの三太」他
絵・清水崑（21年5月）
『三太物語』の始原



(21年6月)



木内高音「建設列車」(21年12月)
絵・鈴木信太郎



ケストナー「飛ぶ教室」
高橋健二訳（21年4月）

飛ぶ教室

1

ニーリヒ・ケストナー作 高橋健二譯

「飛ぶ教室」は、ケストナーの代表作の一つである。飛行機が飛ぶ姿を、子どもたちが想像する姿に似せて描き出している。飛行機が飛ぶ姿を、子どもたちが想像する姿に似せて描き出している。飛行機が飛ぶ姿を、子どもたちが想像する姿に似せて描き出している。

★新しい海外文学の翻訳・紹介にも力を入れた。

シヨウウオ「小さな子供を食べた大きな木の話」
中里恒子訳 絵・ポナアル



小さな子供を食べた大きな木の話
レオポルト・シヨウウオ作
ビニール・ポナアル繪
中里恒子抄譯

林芙美子「新日本イソップ・鶴の笛」(21年7月)



絵・高橋七郎
(21年9月)

童謡・詩と曲譜

★童謡・詩と曲譜は『赤とんぼ』の最大の特色のひとつ。サトウ・ハチローは3号以後毎号作品を寄せ、自身の戦後の童謡創作の出発点となった。高木東六はサトウ作品のほとんどに曲譜を付け、名作を残した。

サトウ・ハチロー作詩

高木東六作曲（21年4月）

絵・村山知義

チャップチャップロンロン
サトウ・ハチロー作詩
高木東六作曲

サトウ・ハチロー
チャップチャップロンロン

皆さんとお話しする頁★

で作った漫画とか笑話を集めてごらく頁とか幸福の頁といふものを作るといふやうには行かないでせうか。(舞鶴・中村) *何げなしに入った本屋さんの隅に真赤な表紙が目に入りました。手にとつてみますとまあ何と楽しさうな赤とんぼで御座いませう。特にこのやうな本に科学読物があるのは大変結構なことだと思ひました。子供にとつて正しいこの種の読物はどんなに心を豊かにふくらますこととせう。(東京・小倉) *三月より同志と語り合ひ「子供教室」を設けて来ましたが、一日も早く昔の赤い鳥のやうな雑誌が発行されるのを願つておりました。そこへ赤とんぼを発見しましたのです。全く飛上りたいやうな喜びでした。早速子供たちにすすめたところ父兄も「よい本を知らせてくれた」と大喜びです(室蘭・斎藤) *私が一番うれしかったのは表紙がステキだったこと、それと猫の絵が沢山あつたこと、私の大好きな豊島先生の童話を久し振りに読むことが出来たことなどでした。(広島・大苗) ▼昭和22年1月 今まではどうかと思つていた綴方も、ようやく皆さんの生活も落ち着いて来たせいかなだんだんに良い作品が集まつて来ます。(…) 入選しない作品でも、いいものは勿論大切にとつてありますし、そこまで達しないものも、全部、柳田国男先生のお手もとへまわつて、言葉の研究の重要な資料になつていきます。どんな初歩の下手な綴方でもその全部が、柳田先生川端先生という、日本でそれぞれ代表的な立場の先生方の御熱意のこもつた研究材料になつていくのですから、諸君も大いに元氣を出して、ますます傑作を送つて下さい。 ▼昭和22年3月 赤とんぼも創刊以来、この号でちょうど十二冊目になる。どの雑誌もが選刊欠刊に毎月諸君のお手もとに雑誌がどけられたことを私は非常にうれしく思いかえしている。(…) 最初からいつているよう

■ここにご紹介できなかった作家・詩人・作詞家・学者・画家・作曲家等々の一部です。

足羽章、阿部艶子、阿部知二、緒方富雄、小川未明、川崎大治、草野心平、小出正吾、阪本越郎、里見弴、神西清、神保俊子、菅井準一、高橋浩一郎、宅孝二、巽聖歌、塚原健二郎、長沢節、中島千鶴、二反長半、花岡大学、日比野士郎、三岸節子、椋鳩十、百田宗治、森田たま、柳田国男、矢野健太郎、山室静、与田準一、脇田和……

童話
生活、リアリズム、小説、メルヘン、民話、神話、海外作品紹介など多彩な内容

野上彰「光ちゃん」
絵・桂ユキ子（23年3月）



光ちゃん
野上彰

岡本良雄「ディオゲネスの家」
絵・松山文雄（22年8月）

童謡・詩と曲譜

藤田圭雄「へんなたまご」
絵・茂田井武（23年8月）

良書予報
西山敏夫

★幅広く読むべきものを紹介。

多様な読物

★文学中心と思われがちな『赤とんぼ』だが、科学・社会・人文記事のほかにも、読者を楽しませる様々な工夫と情報が盛り込まれていた。

野上弥生子「お狂言の物語 ぶす・伯母が酒」
（21年11月）

ぶす
伯母が酒
野上弥生子



★社会時評家たち

新日本 歴史教室 3
舟田 章 雄

木の船とかの船

砂地 雷柱立たない
粘土分のある土

中谷宇吉郎「霜だけ」
（22年2月）



★全31号の表紙絵を描いた出開美千子は20代半ば、一人で雑誌全号の表紙を描くのは絶えてなかった。本文のカットも多く手がけた。清新でときにユーモアのある絵は人気があった。

(つづ)

皆さんとお話しする頁★

といわなくてはならない。今は、ことごとく民主主義という言葉が使われている。しかし、民主主義とは何か——ということは、人々によっていろいろに考えられている。自分のつごうのいいように勝手な解釈をしている人がずいぶんある。(…)もつともらしい顔をしながら、とんでもないニセものにごまかされないようにしてほしい。

▼昭和23年1月 日本では、子供のものというところ、三流四流の人が、それらも不まじめなものでごまかしてしまおうのが今までのならわしです。子供にみせるもの、きかせるものこそ、本当に第一級のすぐれたものでなければならぬと思っております。本当にすぐれたものを知らないうちに、芸術の本当の姿を見る目を持たないあなた方を全く気の毒だと思えます。《赤とんぼ》は、どんなことがあっても、この一線だけはふみはずさないつもりです。いつでも皆さんの目を正しい方向に、真に美しいものの上に向かわせておきたいと思っております。マンガをみるのもいい、バカげた冒険小説を読むのもいい、しかし皆さんの毎月の机の上に《赤とんぼ》一冊がおいてあるならば、皆さんが大きくなつてから、本当の美しいもの、正しいものに接した時、すぐそのものの本質をつかむことが出来ると思えます。

▼昭和23年6月 赤とんぼは高級な気取った雑誌だ、などと考えていたら大間違いです。高級ぶつても気取つてもいません。ただ、マヤカシものや、あなた方をアマヤカスだけのものは絶対にのせないだけのことです。あなた方の心を明るくたのしく美しく、いつも太陽に向つてすすくととのびて行くようにというのがわれわれの願つてるところです。

▼(終刊号) 昭和23年10月 創刊以来、大仏次郎、川端康成、岸田国士、豊島与志雄、野上弥生子の五先生から、蔭になり日向になりして受けた御恩は筆紙につくしがたい。この五先生のお力がなかったなら、わたくしにはこの半分の仕事も

赤とんぼ

刊行の宣言

● 創刊号（昭和21年4月）

表紙と第1ページ

（表紙絵とカットは出開美千子）

子供たちの世界をいつも美しい豊かな讀物でいつばいにしておきたい——それはわれわれの常に抱きつづけて来た強い願望であつた。しかしそれも永い戦争と暗黒政治の間には、こと毎に妨害され壓迫されつづけて来た。子供たちは所謂「ヨイコード」になるやうにときびしい枠にはめられ、馬車馬のやうに一つの道を走らされてゐた。今やこの子供たちの肩からその軛を脱し目かくしをとりのぞく時が来た。心豊かな明るい讀物を澤山に與へることによつて、こんなに美しい世界があつたのか、こんなにたのしい場所があつたのかと、思はず大聲をあげて喜ぶ子供たちの姿を思ふ時、われわれの心は躍るのである。われわれは何にとらはれることもなく、あらゆる面から、あらゆる階層の人の協力を得て、子供たちの世界に限りなき夢と知識の泉をそそぎかけたいと願つてゐる。どん底に落ちた日本を美と力に満ちた國に作り上げて行かねばならぬ今の子供たちに、どちらへもかたよらぬ豊かな情操を養ひ、暖い心と正しい判断力を持つた人間にするやうに、あらゆる努力を傾倒したいと思つてゐる。大正の頃鈴木三重吉氏によつて主唱された赤い鳥の運動をわれわれはまだ昨日のことのやうに覚えてゐる。われわれの今度の仕事を通じて子供の世界にもう一度輝かしい文藝復興の時が將來されたならその喜びは限りない。子を思はぬ親はなく、子孫に期待しない愛國者はあるまい。願はくはすべての有志の方々の協力によつてこの仕事を今のわれわれの爲し得る最上の贈物としてわれわれの後継者の手に捧げたい。

〔赤とんぼ會〕 大佛 次郎 川端 康成
岸田 國士 豊島與志雄 野上彌生子

赤とんぼ 四月・第一號

椎の木……………豊島與志雄 2
田園都市……………青木 茂 12
冬の朝……………木内高音 17
雪を消す話・中谷宇吉郎 24
本のさしゑ・緒方富雄 32
飛ぶ教室……………ケストナー 38



(1)

お話しする頁★

出来なかつたことと思う。仕事の上で行きづまつたり、こまつたりした時、いつもわたくしはわたくしの上にそそがれている五人の先生方のあたたかいまなこを思いうかべて、また、元気をふるいおこして来たのである。そのほか、柳田国男、サトウ・ハチロー、高木東六、村山知義、出開美千子、野上彰、波多野完治、竹山道雄、西山敏夫、猪熊弦一郎、脇田和……数えて来たならば限りがないほど、わたくしは多くの方々の厚意にかまれないほど、わたくしづけて来た。わたくしはここにあらためて、わたくしを上げまし、赤とんぼを育て上げて下さつた諸先生にお礼を申上げる。そして同時に、この仕事を愛しつづけて下さつた読者の方々に心からの《ありがとう》をいわせていただく。(藤田)

四月・第一號



赤とんぼ

(目次)

〈総論〉

二次大戦直後期の児童雑誌（上笹一郎）
雑誌『赤とんぼ』の総合研究（長谷川潮）
〈児童ジャーナリスト〉としての藤田圭雄（上笹一郎）

〈童話論〉

『赤とんぼ』の童話作品について（藤田のぼる）
青木茂『三太物語』の始原（関口安義）
『ビルマの豎琴』と竹山道雄（長谷川潮）
児童文学の建設：木内高音のことなど（宮川健郎）
『赤とんぼ』の女性作家たち（尾崎るみ）
『赤とんぼ』に掲載された翻訳ものの特徴（石澤小枝子）

〈童謡論〉

『赤とんぼ』の詩・童謡（畑中圭一）
『赤とんぼ』におけるサトウハチローの存在意義（菊永謙）
野上彰の人と作品：孤独のザクロ（野呂昶）
童謡詩人＝藤田圭雄の作品世界（尾上尚子）
『赤とんぼ』の童謡作曲（早川史郎）

〈読物論〉

多面的な教養読物（長谷川潮）
『赤とんぼ』の綴方（太郎良信）
『赤とんぼ』のイラストレーション（上笹一郎）

〈『赤とんぼ』記録〉

『赤とんぼ』の創刊から『少年少女』廃刊まで〈再録〉（藤田圭雄）
一投稿者としての記録（石澤小枝子）
“あしながおじさん”だった父（末松氷海子）

〈『赤とんぼ』寸録・寸想〉

頂門の一針（小沢信男）
『赤とんぼ』に出会った喜び 広がる世界（川端律子）
『赤とんぼ』と柳内先生（和田誠）
「はじめての海」に（矢崎節夫）
『赤とんぼ』雑感：「ビルマの豎琴」をめぐって（宮澤健太郎）
『赤とんぼ』と子どもたちの生活史：雑誌は優しく応えてくれる（谷萩弘人）
「レオポール・シヨーヴオ」のこと（いとうゆうこ）
実業之日本社の新機軸（上田信道）
鉛筆が翼であったころ（本間ちひろ）

【編集者、投稿者、寄稿者、綴方指導者、研究者】のちろ

付：全巻目次 作者別作品索引



読者の皆さまへ

昭和20年（一九四五）8月の敗戦後、日本人の大部分は、とにかく生き延びるだけという最低限の状況にあったが、半年も過ぎると、児童のための雑誌が陸続と産声をあげていった。——『子供の広場』（21年4月〜25年3月）、『銀河』（21年10月〜24年8月）、『童話教室』（22年1月〜23年12月）、『子どもの村』（22年6月〜25年4月）、『少年少女』（昭和23年2月〜26年12月）などで、大正期に『赤い鳥』『おとぎの世界』『金の鈴』『コドモノクニ』などが次々と出現して以来の児童雑誌ルネッサンスの観を呈した。

その中でも『赤とんぼ』はいち早く（昭和21年4月）世に出た雑誌である。占領下の検閲があつただけでなく、印刷用紙ははまだ配給、インクの品質は不良と資材にこと欠く時代、ページ数は48から80（平均60ページ強）と小冊を強いられながら、毎号清新な多色刷りの絵で装われた表紙と絶好の人を得た作品の数々は、全国の若い読者を樂しませ、胸躍らせたに違いない。

「子供たちの世界をいつも美しい豊かな読み物でいっぱいにしておきたい」から「願はくはすべての有志の方々の協力によつてこの仕事を今のわれわれの為し得る最上の贈物としてわれわれの後継者の手に捧げたい」に至る刊行の宣言「対向」に秘められた熱い心情を、すでに戦後60年以上を経過したいま現在の私たちは、どう受けとめるべきだろうか。

『赤い鳥』運動の精神を受け継ぐべく、子どもには最高の文化を芸術を教育をと、理想を高くかざした『赤とんぼ』全31冊（昭和21年4月〜23年10月）には、多くの日本人が見失った真摯さ、ひたむきさ、人間への思いやりが充ちている。『赤とんぼ』は作り手（作者・編集者）と受け手（読者⇄子供・大人）との〈対話〉で構成される小宇宙であつた。なによりも『赤とんぼ』には、人がゼロから立ち上がるようにするときの、希望を抱えた明るさがある。

一号一号を手にとつてページを繰つてほしい。童話、童謡、詩、楽譜、翻訳、再話、挿絵、科学・歴史・社会読物、良書案内、遊び、そして綴方——望み得るかぎりの寄稿者と洗練された作品、そのすばらしさをいま味わつてほしい。そして、次代をになう子どもを思う気持はいつの時代も変わらない真理であることを、もう一度共に確認したい。大いなる愉しみと喜び、そして明るさをもって——。

平成二二年一月

大空社



〈終刊号〉昭和23年10月